自選「作家の旅」

吉行淳之介

自選「作家の旅」
吉行淳之介

●——1976・11・1・第一刷
●著者——吉行淳之介
●発行者——川崎吉光
●発行所——株式会社 山と溪谷社
東京都港区芝大門一-一-三三 郵便番号105
電話＝東京(03)四三六-四〇二一 *代表
振替口座＝東京八-六〇二四九
●装幀——井上敏雄
●印刷所——明善印刷株式会社
●製本所——株式会社明光社

© Junnosuke Yoshiyuki 1976 Printed in Japan

自選「作家の旅」

吉行淳之介

山と渓谷社

自選「作家の旅」吉行淳之介

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

自序――街角の煙草屋まで行くのも旅と呼んでいい　7

I――17

海へ山へ　19
北海道についての二つの挿話　35
札幌の一夜　39
北陸温泉郷・芸者問答　45
比叡山の日の出　66
京の女・京の夜　69
「伊豆の踊子」とその周辺　86
岡山　108
帰郷について　114
屋島登山記　119
榛名・赤城どらいぶ風土記　141

II――149

都会の中の旅　151

東京の屋根の上　156
九百九拾円の放蕩　167
夜の観光バス　194
東京・深夜紀行　204

Ⅲ――――225

ラスベガス賭博見聞記　227
二度目のラスベガス　239
ローマのレストランで　249
バンコク三人旅　253
パリの娼婦　278
猫灰だらけ　291
葡萄酒とみそ汁　295

あとがき――――310

口絵写真＝多摩川の川原にて（一九七五年）――撮影・斎藤康一

自序

街角の煙草屋まで行くのも旅と呼んでいい

この旅行記の叢書の一巻に、私の分が入るのを意外におもう人が多いだろう。家に閉じこもっていて、外へ出るときは夜の街にしか行かない男、というイメージが強いとおもう。じじつ、実態はほぼそれに近い。

しかし、中学生のころは、旅行が好きだった。小遣いに制限があったから、遠くへは行けなかったが、ある日曜日に早起きして、友人と三人で東京駅から汽車に乗った。小田原で降りて、バスで芦の湖畔まで行

き、そこから裏道を地図を頼りに迷いながら降りてゆき、ようやく御殿場の駅にたどりついた。当時は御殿場線という国鉄があって、蒸気機関車が引っ張る列車に乗って帰宅したときには、夜もかなり遅くなっていた。

このときには、休む暇もなく動きつづけたようにおもう。本格的な旅行好きとか、山登りばかりしている人の眼からは児戯に類することだが、いまの自分と思い合わせてそのことを思い出すと印象が深い。

戦争が終ってからの十年間は、二度倒産した会社をその度につくり直したりして働きつづけていたので、金も暇もなく旅行どころではなかった。戦後三十年、私は一度も避暑というのをしたことがない。やや余裕ができてからも、依怙地に暑い東京にいるのは、おそらくこの時期の気分が尾を曳いているのだろう。

この十年間くらいは、旅行して文章を書く依頼が、いろいろの出版社からある。旅費宿泊費を自分で出さないで旅行することができるわけで、結構な話なのだが、そういう依頼があったときには反射的に「面倒くさいな」とおもってしまう。それは主として健康状態のためなので、

根は旅行好きの身なのだから「旅行したいのだが健康に不安があるので引き受ける気になれないのが残念」という気分になるのが筋道とおもうのだが、そこらあたりは自分でもよく分からない。

その答えの一部を、ややシニックな色合いで書いた「海へ山へ」という文章を、巻頭に置いてみた。

今年の春にも、「パリへ行って、モンマルトルあたりで一週間ほどぶらぶらして、原稿を書いてほしい」という結構な話があったが、一、二日考えて断った。片道十八時間というのを思い出すと、うんざりしてしまう。

ただ一たん出発してしまえば、神経の上では私はなかなかタフで、その土地々々のうまそうなものを店構えで判断して食べ、日本食に郷愁を感じることはない。どんな屋根裏部屋へ泊ることになっても、むしろその状況を面白くおもい（先年、パリのAクラス・ホテルの屋根裏部屋に入れられた。シャワーもトイレもなく、手洗い用の容器だけが付いている部屋だったが、そこで小便は済ませて、愉快に一夜を過した）、気楽に旅をすることができる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

さらによいのは、旅先で私はいろいろの不思議な見聞や奇怪な情景に出会うことができる。このことを、私は一種先天的才能とおもっている。つまり、そういう事柄を磁石のように引き寄せる才能である。

このことに期待して、たまには旅行に出かけてみようという気分に襲われることがある。その気分と旅行の依頼とが一致したとき、私は旅に出ることになる。そして、最初から原稿を書くことを義務づけられているので、ある分量の旅行記が残っているわけだ。

ここで旅とはなにか、を別の角度から考えてみたい。

ヘンリー・ミラーが若いころパリのクリシー通りに住んで、貧乏な生活を送っていたころ、ふと思い立ってロンドンまで旅行しようとした。その動機をもう少し親切に説明すれば、

『ことの起りは、僅かの間でいいから、もう一度英語を話す人のあいだに身を置きたい、という気持になったからだった』

と、ミラー自身が書いている。

ディエップから船に乗り、ドーヴァー海峡を渡ってニューヘイヴンに

着いたが、ミラーは税関のところで上陸を拒否された。イギリスに出稼ぎにきた人物と見做されたためで、翌朝の船でフランスへ送り返されてしまう。この経緯を「ディエップ＝ニューヘイヴン経由」という小説にミラーは書いているが、その終りのあたりで、船の中で知り合ったフランス人が、別れるときに、

「ボン・ヴォワイヤージュ！」

と挨拶を送ってくる情景が出てくる。

この言葉は、フランスでは矢鱈に聞えてくるもので、そこからしばらくして次のような部分になる。

『不意に、馬鹿みたいに幸福な気分になって、立ち上って大声を出したり歌ったりしたくなった。しかし、思いつくことといえば「ボン・ヴォワイヤージュ！」だけだった。なんて文句だろ！　フランス人が与えてくれたこの文句をあちこちで呟きながら、私たちは一生涯動きまわっている。しかし、これまでに良い旅（ボン・ヴォワイヤージュ）などしたことがあるだろうか？　私たちが飲み屋や角の八百屋まで歩いて行くときでさえ、それが二度と戻って来ないことになるかもしれない旅だとい

うことに気が付いているだろうか？　そのことを鋭く感じ、家から一歩外へ出る度に航海に出たという気になれば、それで人生は少しは変わるのではないだろうか？　そこの街角までとか、ディエップなりニューヘイヴンなり、どんなところへでも、小さな旅をするあいだに、地球のほうも、天文学者さえも知らないところへ小旅行をしているのだ』

ミラーの文章は、以下どんどん哲学風になってゆくが、ここに引用した部分を私の都合のいいようにねじ曲げると、「街角の煙草屋まで行くのも、旅と呼んでいい」ことになる。

そうなれば、角の煙草屋までとか坂上のパチンコ屋まで、私はしばしば旅立っていることになる。それは冗談半分だが、ミラーのその作品を読む前に、私は、「都会の中の旅」という題名のエッセイを書いている。以前から、自分の住んでいる都会の中を動くことを、私は旅と受け止めているところがあるようだ。

事実、外国を旅行しても、住んでいる都会を動いているときも、眼のつけどころは同じような場合が多い。そのことは、この集に収録した「ローマのレストランで」（『湿った空乾いた空』という小説の一節だが、

この部分は実際に見聞した）を読んでもらえば、よく分かるとおもう。さらに、旅行しても私は観光ということを一切しないので、その内容はますます東京の中を動いていることに近くなってくる。

しかし、私は風景に興味がないわけではない。むしろ関心があるのだが、この件に関しては私の頭の中に写真機のフイルムのようなものが入っていて、チラと見ればそれで済む。「風景」がそこに焼き付いてしまって、適当なときに思い出せばよいことになる。落語の若旦那が、「酢豆腐は一口にかぎる」と言ったように、「風景は一目にかぎる」のである。

カナダに行って、ヴィクトリアの有名な花畠のところで観光バスが停った。面倒なので一人だけバスの中に残っていると、世話役の青年が戻ってきて大声で呼びかけた。

「想像を絶する眺めです。見落すと、一生のご損です」

このときは、招待旅行で、その青年としてはバスから出てこない客がいると立場上具合が悪かったのだろう。それにしても、花畠に関して「想像を絶する」とは、小説家の想像力にたいして、何という無礼な言

い草だろうか。

「ああ、いやだいやだ。招待旅行など、くるんじゃなかった。タダほど高いものはない、とはこのことか」

と、不承不承バスから出た。

想像を絶しはしなかったが、その花の色はパステルカラーで、日本ではけっして見られないものだった。見ておいてよかった、とおもったが、その花畠は矢鱈に広く、雨も降っていて閉口した。

東京でも、ときおり不思議な「想像を絶する」色合いの夕日や夕焼け空を見ることがあって、そういうときには「おや」とおもい一目だけ見る。

東京都内にも、好みの風景はいろいろあって、時折思い出すことがあるが、わざわざそこに出かけることはしない。たとえば、御茶の水の「山ノ上ホテル」の裏手に、路がしだいに細くなって突き当りに急勾配の長い石段がある。崩れかかったような古い石段が、目の前にそそり立つ感じになる。

あるいは、いまは無くなったが、有楽町から東京駅への道の両側に、

赤煉瓦の建物が並んでいるところも好きだった。

この風景は、私の中では、スペインのトレドの町の眺めと同じような位置にある。石甃と石の建築物の町で、その全体がくすんだ紫色にみえる。

といって、古風な眺めばかりを好んでいるわけではない。赤坂溜池の近くに、見上げると高速道路が複雑に交叉しているところがある。視線を少し下げると、舗装された広い下り坂が眼に映る。そういう眺めも、なかなか良いものだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook